

吉岡洋とゲストによる  
哲学とアートのための 12 の対話 2024

# 土曜の放課後

第3回

話す会

---

## 第3回 話す会

吉岡 洋（進行 安藤泰彦）

---

前回の「土曜の放課後」で行われた佐伯啓思 X 吉岡洋の対談の記録映像から最初の一部をモニターで上映し、吉岡洋による講座の導入とした。

\* \* \* \*

吉岡 初めての雰囲気ですね。でも今日のこの雰囲気が、一番普通のトークっばいというか。そんな感じもします。考えてみると去年からこの講座で、畳以外のところでしゃべるのは初めてですね。畳じゃない方がこういうふうになりと密集できるという感じだと思います。この場所は僕も下見には来たんですけども、あまり普段来ることのないところだったので、ちょっとわかりにくかったところもあったかと思います。下の入り口のところに「土曜の放課後」って書いてあって、出演者は吉岡洋、「日本について雑談する」と書いてありましたね。あれを見た時に僕、「あやしいー！」（笑）と思った。「日本について雑談する」って、本当は政治的な集会なのにそれをごまかすために「雑談する」って書いてある、右翼の秘密集会ですかね。そういう印象を受けたんですが、悪くないと思います。

そのとき思い出したのは、こういうことって歴史上よく起こるんですよ。外で禁じられていることを室内空間でやるというか。冷戦時代にロシアや東ヨーロッパのアーティストが、外で発表すると捕まるような作品を自分の家で展示するとか、そういうこともあった。それからもっと古くは、19世紀のフランスで「改革宴会」というのがあったでしょう。世界史で習ったかもしれませんが、フランス革命、ナポレオン戦争が起こって、それが終結した後に、

王政復古でブルボン家が戻ってくる。ルイ18世とシャルル10世が絶対王政を復活させるが人気がなく、1830年の7月革命でオルレアン家のルイ＝フィリップによる立憲君主制になります。しかしこれも不評で、議会は開くけれども、王様の気に入らんことを可決しそうになったらすぐ解散。政権に反対する集会もデモも禁止しました。しょうがないから、みんなでレストランを借り切ってパーティーという名目で、実際には反政権の集会をしたんですね。そういう「改革宴会」が出てきて、それも結局禁止されました。それでフランス人はブチギレて、1848年の2月革命になります。

改革宴会というのは、こういう感じの雰囲気だったのではないかな。この講座は別にナショナリストの集会ではないんですけどね。記録映像の中で佐伯さんがある時自分がナショナリストとして紹介されたと言っていましたけれども、それは多分、司会者がナショナリストという言葉の意味を知らなかったのではないかな。自分の国、日本について問題にするというのが「ナショナリスト」だと思ってたんじゃないかな、彼を紹介した司会者は。ナショナリストというのはそういう意味ではなく、現在の状況から言えばグローバリストの対極になるイデオロギーで、国家を中心に考える思想です。必要な国家の境界をちゃんと設定しようというだけではナショナリストではないし、日本が大事だということを言うだけでは全然ナショナリストじゃない。彼が言っていたようにまったく普通のことだと思いますよ。

僕は佐伯さんから見たら一回りぐらい下の世代なんです。彼は40代ぐらいの時にイギリスに留学したと言っていましたけれども、僕は30代の前半にオランダに1年間、在外研究みたいな形で住んでいたことがあります。オランダっているん場所から人が集まるから、様々な国の人と喋る機会がありました。日本にいた時も京都にいと外国人が来るから、大学でも話す機会はそれ以前もあったんですけど、それはわざわざ日本に来る人たちですよ。日本に来る人たちははじめから日本のことを好きで興味がある人たちなんです。それに対してオランダで出会った人たちは、いろんな理由でそこにいる。だからまったく違う話になります。そこで、佐伯さんが言っていたのと似たような

経験をしました。

つまり多くの人は、自分の国についての概念をちゃんと持っているんですね、自分の中に、良くも悪しくも持っているんです。必ずしも愛国者というだけではないんです。それぞれの国の中で、たとえ自分がその国に所属していても、その中でマイノリティというか、不利な立場に立たされていたり国から弾圧を受けているような人は、愛着と同時に反発も持っている。複雑ではあるんだけど、自分の国はこういうものだという意識ははっきり持っている。それを前提に喋るんだけど、僕は日本から来て、もうすでに大学に職を得て30代前半の講師みたいな職業人をしているくせに、そういう人たちとお互いの国のことを喋ると、自分自身の国である日本について自信を持って言えることがないんですよ。

別な言い方をすると、日本で日本人同士で日本について話すときのような文脈では話せないのです。それはなぜかという、日本について本当に考えたことがなかったからですね。それはやはり異常なことだなと思いました。外国滞在で同様の経験している人って結構いると思うんですよ。日本人で海外に行って初めて「日本って何だったんだろう」って、日本にいたときは全然考えなかったことを考えてしまうということがあると思うんですよ。

逆に考えるとなぜ多く他の国の人は、たとえ海外に出なくても、自分の国はこうだというものを、ある程度それぞれ自分なりの理解をしているのに、日本だけがそれをしにくいというか、日本にいる日本人だけがそれをしにくいような環境が、なぜあったんだろうなと思うんですよ。

そのことが、日本について考える大きなきっかけになっていると思います。僕は1992年から93年にかけて、オランダのライデンという町に住んでいて、そこから電車に乗って首都ハーグ「社会研究所」という機関に、客員研究員みたいな資格で所属していました。ISS (Institute of Social Studies) という機関で、それは何かというと、世界中から大学院博士課程の大学院生を受け入れる人文社会学系の研究所です。政治経済、現代思想、中でも開発や脱植民地主義に関する研究が中心になっていました。オランダって、植民

地主義の歴史の中でいろいろと悪いことをしてきたじゃないですか。その反省もあって、90年代から思想とか政治学の分野でポストコロニアリズムという問題が取り上げられてきました。つまり、植民地主義の時代は形の上では終わったけれども、いまだに植民地主義が残したメンタリティ、文化は色濃く残っていてなかなか消すことができない。ヨーロッパにとってのアフリカ、中東、ラテンアメリカとの関係において、植民地主義というのは、要するにその国が形式的に独立したらそれでOKというか、それで植民地主義が単純に終わるわけではない。長い歴史の中で宗主国が残していった文化、言語、そういう非常にベーシックなものも含めたものが残って、それは消し去ることができない。その中でどうやって、非西洋世界は自分の主体性を取り戻すのかと。そういう問題意識に基づいて、主として海外から学生を募集して博士課程の教育をする機関です。

だから社会研究所はオランダにあるんですけども、完全に中は英語だけの世界なんですね。オランダ語を話す必要はありません。オランダはもともと英語が通用する国なので、オランダ語なんか全然勉強しなくていいんです。ただ僕は在外研究で1年間そこにゲストとして滞在する気楽な立場だったので、せっかくいるんだからオランダ語もちよっと勉強しようと思って、別な場所でオランダ語の講座とかに入ったりしました。そしたら周りのオランダ人から「なんでオランダ語なんか勉強するんだ？」って責められた(笑)。「やめとけやめとけ、時間の無駄だ」って。

たしかにオランダ人はほとんど英語ができるし、必要ないんです。それに日本に帰ったらオランダ語なんかまず使う機会はないし、世界の他の場所でもあまりないでしょう。だからたしかに、オランダ語を学ぶ必要なんてないわけです。そんな暇があるんだったらスペイン語とか勉強しといたらどうだ」とか言われました。その方が役に立つと。

研究所の中では完全に英語なんです。そこに入学する資格が、非ヨーロッパ人、非西洋人の学生は、試験と面接だけで入れるんですが、ヨーロッパや北米圏の西洋人はですね、2年以上非西洋圏における何らかの活動経験を持っている人しか入学資格がないんですね。そういう非常にはっきりしたポ

リシーで学生を集めているという場所だったんですね。

そこでいろいろな国から来た人たちと話す機会がありました。東アジア地域の学生は比較的少なかったですね。中国人と韓国人は少しいましたけれども、日本人や東南アジアの人はあまりいませんでした。多かったのはアフリカと中東、インドやパキスタンから来た人でした。そういう人たちとしゃべったり、僕は学生じゃなくてフェローだから授業もさせられてたんですけども、その経験が30代の頃研究者としての意識を持つ上で、また大学に就職して2、3年目ぐらいでしたが、決定的だったんですよ。在外研究で何を学んだかという、別にそこでしか見られない資料を読んで勉強できたというような、そういうのはあまりないんですけども、世界中から集まった人たちと会えたことが、すごい経験だったなと思います。

それからもちろん言葉の問題ですね。オランダ語は時間の無駄だからやめろと言われたからやめたんですけども、半年ぐらいは勉強しました。でも、やめろと言ってくれた人の言うとおりで。完全に忘れました。日本に来たら1回も使う機会がないですからね、この30年ぐらい。それより英語が大変だった。僕は30代まで、もちろん大学受験もあったし研究でも必要だから勉強してきたんですけども、コミュニケーションの訓練はしていない。大学で観光ガイドみたいなことはやったんですけど、そんなんいい加減ですからね。シリアスな内容のあるコミュニケーションや議論をできるような訓練を全然しない状態で行ったから、最初の数ヶ月はほんとにつらかったですね。もう帰りたくなった。帰りたくなったもう一つの理由は、オランダの冬が暗くて天気が悪すぎるということもありましたけれども。

だけど、いろいろ……。ああ、そうそう、ちよつと雑談みたいになるけど、あ、これ雑談だった(笑)。雑談なので脱線してもいいと思うんですが、日本について考えるときに、よく日本人は英語ができないとかいうことを言われるし、日本人自身も言うじゃないですか。あれ完全に嘘だと思うんですね。日本人が英語ができないのは、英語をしゃべる必要がないからなんです。つまり、

英語なんかできなくても十分職業はあるんですよ、今のところ日本ではね。それだけのことだと思います。

オランダ人もそうですが、たとえばスカンジナビアから来た人たち、デンマーク人の友達とかできたんですけども、僕から見たらネイティブスピーカーと同じぐらい英語できるなと思った。でもよく考えたらデンマークって人口が600万人もいないんです。そこで仕事しようと思っても、デンマーク語しかできなかつたら仕事の範囲は極度に限られてきますよ。英語はもちろんですけども、それ以外に二つぐらいヨーロッパ言語をしゃべれないと、有利な職業にはつけない。デンマーク語で小説を書いても、翻訳されない限り読者人口は限られています。よっぽど成功しないと作家として通用しないですよ。それだけの読者人口がないから。それに対して日本語だと、1億2,000万人の読者がいる。まあ赤ちゃんは読めないけれども、1億人ぐらいの読者がいるわけだから、日本語だけで書いても作家として十分やっていけます。他の職業でも。つまりマーケットの問題なんですよ。

それに比べて自国語のマーケットが小さい国は、通用度の高い言語を最低1個か2個習得するのが当たり前になるので、そういう環境に置かれたら、どんな民族のどんな人種の人でも普通に外国語ができるようになる。当たり前だと思うんです。デンマークの人口って、京都府よりもちょっと多いだけなんです。仮に京都府の中でしか通用しない言語があったとして、私はそれしかできませんと言ったら、それは職業のチャンス狭くなりますよね。そういうことです。

だから、よく日本人が自嘲的に英語ができないと言うけれども、あれは本当は自慢ともとれるんですよ。英語ができなくても俺たちは生きていけるぞということなんです。言う本人は自覚していないだろうけれども、それだけ恵まれているってことなんですよ。ではなんで英語ができた方がいいという価値観があるのかというと、それはかつこいいからですよ。つまり英語能力とは美的価値なんです。実用性じゃないんです。できなくてもほとんど困らないけれども、できた方がなんとなくイケているなっていう、その程度のことなん

ですよ。

その証拠に、日本の英語文化って一番、英語の「美的」側面に重きを置くんですよ。これは感じたことはある人が多いんじゃないかなと思うんですけども、例えばここでは英語しゃべりましょうみたいなサークルがあったとします。学校とか英会話学校とか、なんかそういうところで。そこでたまたま一人だけ帰国子女みたいな、完全に北米圏の中産階級の白人の発音とかイントネーションでしゃべれる子が混じっていると、他の人たちが萎縮してしまうんですよ。自分の日本人的なアクセントではしゃべりにくくなる。そういう状況ね。英語圏で何年か過ごして日本の普通の中学や高校に入った子たちが排除されたりいじめられるというのもその反面です。

まあいじめられるとは限らないし、うまくいけば尊敬されるかもしれないけど、同じことなんですけどね。要するに特別視される。そういう現象が起こる。昔に比べるとちよつとずつ変わってきたなとは思いますが。

最近JRとかに乗ると、運転手さんが「ザドアオンザライトサイド・ウィルオープン」とかアナウンスしてますね。カタカナ的な英語発音で。それまで英語しゃべるなんて思ってなかった年配の人が、すごく不得意で苦勞して言っているみたいな声もあって、こんなこと無理やりやらされて可哀想だなと思って涙が出てくるんです。急に会社の方針でやりなさいと言われて。全然やりたくないですよ。昔の車内アナウンスはどうだったかという、英語の部分はネイティブスピーカーの人が吹き込んだ録音を流していましたよね。けれどもインバウンドになってから外国人がいっぱい来るから、テープ流してアナウンスだけだったらいけれども、直接訊ねられたりしたら対応できないから、みんな英語を話しましょうという方針になったんでしょうね。

でも、ああいうのが本当の英語だと思うんですよ。年取ってから無理やり英語を喋れと言われるのはかわいそうだけど、そういうのが普通なんです。英会話教室みたいにきれいで自然な発音じゃなく、カタカナ英語みたいな発音で間違いながら喋る、それで無理やり通じるようにするというのが、世界標準です。これでやっとならグローバルスタンダードになったんです、日本の英語が少しずつ。そういうことだと思います。



90年代に勤めていた私立大学で、20人くらいの交換留学制度があって、カナダとかアメリカ合衆国とかと協定で毎年20人くらいずつ学生を交換しているんです。海外から来た学生たちは学部学生で、ちょっとは日本に興味があって来たんでしょうけれども、日本語なんか全然できないんですね。それで普通の授業に出ても分からないから、言語文化センターというところが提供する特別の授業があって、彼らはそこの授業だけ受けるんですよ。そこの授業を先生の中から誰かが担当しないとイケない。

英文科もあるし英語の専門家はいっぱいいるんだから、そういう人たちがやるのかなと思っていたら、在外研究から帰って来たら「吉岡さんやってください」と言われた。「僕よりもずっと英語の専門家がいっぱいいるじゃないですか」と言ったら、「英語の先生たちはやらないんです」と。自分の英語は完全じゃないのでしゃべりたくない。それを聞いたときにすごくびっくりしたんですが、どういうことか理解はできた。

小中学校の英語の時間とかに、英語圏から来た母語話者の先生と、日本人の先生が二人でやったりする時に、日本人の先生はこれからこういう話をしますみたいなことを日本語で説明して、文法の説明とかはして、ネイティブスピーカーの先生がしゃべる、みたいな構造があります。テレビやラジオの語学講座でも、なんとなくそういう役割分担みたいなのがありますね。こういうのは従来の日本の外国語教育で普通だったんですが、僕は根本的にあかんと思ったんですよ。何があかんかという、特に子供は、教育において何を最初に学ぶかという、教科内容を学ぶんじゃなくて、それを教えてくれる大人がその教科内容に対してどんな態度をとっているかということ、まず最初に吸収すると思うんですね。

たとえば数学の先生が、いかにも楽しそうに問題を解いているのを見ると、自分はその数学の内容がちゃんとわからなくても、数学っておもしろいやという、その情報が最初に伝わる。英語の場合だったら、日本人の先生がしゃべらないで外国人の先生にだけしゃべらせることで何が伝わるかという、子供にとっては、英語の専門家である先生すらしゃべらないんだということ

がまず伝わるわけですよ。子供はそこまで意識はしないだろうけれども。英語とは、この外国人のネイティブスピーカーの人がしゃべるようなしゃべり方ができるまではしゃべっちゃいけないだと思ってしまう。それでは、永遠にしゃべれなくなります。

日本人の先生がカタカナ発音で間違いながらでもしゃべれば、子供たちは「あ、これでもいいのか」と思うし、「自分も勉強すればこの先生よりはましかも」とか思う(笑)。つまり日本人同士でも必要があれば英語で話すのは当たり前なんだということを伝える。それが大事なんですよ。これがグローバルスタンダードです。

このことを、英語だけでなくドイツ語でも実証しました。その言語文化センターにすごくやる気のあるドイツ語の先生がいて、ドイツ語教育の改革を推し進めていたのですが、周りの年配のドイツ語の先生からはちょっと嫌がられていたんです。なぜかというと、僕の世代くらいまでは大学の第二外国語って大体ドイツ語かフランス語がほとんどで、一年目の授業では文法を教えて、二年目は簡単なリーダーを読まされてそれで終わりなんですよ。コミュニケーションなんて全くなくていいんです。だから語学の先生っていうのは、そういう授業の専門家だったわけですね。ところが留学経験もあるそのやる気のある先生は、これからはドイツ語でも話せるようにならなければいけないと考えて、授業を改革していきました。

僕よりもちょっと上ぐらいの年代の、英語以外のヨーロッパ言語の先生たちは、反英語主義なんですよ。戦後の、何でも英語だけになる文化に反抗してドイツ語やフランス語を学んだ人が多い。今はそんなことないですけどね。だから英語支配に対して、ドイツ語でも自然なコミュニケーションをできるようにしなきゃいけないと考えるのは理解できます。それで、それまで別々だったドイツ人教師と日本人教師を組み合わせ、二人で授業をする新カリキュラムを導入した。学校としては歓迎なんだけれども、それまでのドイツ語の先生には大不評でした。そんなこと絶対やりたくない。

でも僕はもともとドイツ語の専門家じゃないから、面白いなと思った。僕は

ご存知の通り哲学・美学の専門ですけれども、それでは就職がなかったのが、最初に就職した大学ではドイツ語教室に所属していたんですね。信じられないですけれども、最初はドイツ語教師だったんです。それで普通の教科書で初級ドイツ語の授業とかやらされて、それは毎週文法事項を教えていって、第30週目には接続法第二式を教えてそれで終わりみたいな、昔ながらのカリキュラムでした。そういうのは本当につまらないなと思っていたので、この新しいペア授業やりますか?と言われたとき、面白そうだからそっちにして、と。年配のドイツ語の先生たちは嫌がってるから、ちょうどよかったんです。

それでドイツ人の先生と二人でやりとりしながらコミュニケーションの授業をやるというのがわりと楽しかったですね。それはやはり自分がまだ若かったし専門家じゃないという気楽さがあったというのも確かにあります。ドイツ語の専門家じゃないから。大学や大学院ではドイツ哲学を勉強していたけど、哲学書しか読んでないですからね。カントやハイデガーの本は読めるけれども、普通のドイツ語の大衆小説とか新聞とか読もうとしたら、なんて難しいんだと思うような実力でしたから。これはでも外国文化を学ぶ人にとっては当たり前前のことですよ。哲学書はドイツ語で読めるのに、日常会話では間違え。母語話者からしたら不思議でしょうが、そういうものですよ。

どうしてドイツ語の先生になれたかという、1990年代はまだ若者人口が多くて、大学の第二外国語でドイツ語を選択する学生が多かったからです。先生が足りなかったので「ドイツ語教員の口だったら空いているけど」と言われ「ドイツ語教えますか?」という質問に、「教えます!」と言って最初の就職が決まったんですね。

外国語をこれから習得したいなと思っている人は、できたらこういう環境が最高に効率的だと思っている条件があるんです。それは、その外国語を対象として学ばないことです。その外国語を学びに行くんじゃなくて、その外国語を使って何かをしなければならない状況へ自分を追い込むのが、一番効率がいいと僕は思います。学ぶよりは、教える方が効率いいです。だけれども、これは心理的なプレッシャーがすごいから、楽ではないです。学ぶのは気楽

ですからね。できなくて当然だから、先生に教えてくださいと言っていたらいいんだから。それに対して、教えるのはいろいろ肩に背負うものがあるでしょう、それがいいですよ。しんどいけど。

何か言葉の話ばかりになったけど、それを通じて日本がわかるのかな。さっき、オランダ滞在中にオランダ語講座に出たら、「時間の無駄だからやめておけ」と言われたという話をしましたが、それは半年でやめました。でも、オランダの冬は暗くてみんな家に引きこもるんだけど、夜になると市民大学講座みたいなのがいっぱい開かれるんですね。みんなそこに行くんですが、その多くが外国語講座なんです。大体はフランス語、スペイン語かイタリア語が人気なんです。それは何でかという、翌年の夏にバカンスに行くためです。もちろん真面目に勉強したい人もいますが、多くの人がバカンスに行つて、レストランで自分の好きなものを注文したいという動機で勉強するわけです。

それで僕はバカンスはともかく、せつかく海外滞在で比較的時間があるから、オランダ語ではなくても何か外国語を話す練習をしておこうと思いました。最初はフランス語を申し込んだ。フランス語も読めることは読めるんですけども、しゃべったことがなかったので。オランダのフランス語講座はきつとレベル高いだろうなと思って、申し込んだらまずクラス分けのテストされました。それは簡単な文法のテストで、満点なんです。すると「中級か上級に入れ」と言われて、入つてみたけどほとんど聴き取れないし話せない。それで「すみませんが初級に変えてください」と言つたら、初級はもういっぱい空きがないと言われた。で、スペイン語なら初級がまだ空いてると。

スペイン語はやったことないけど、世界中で多くの人が話している言語だし、勉強しておいて損はないかなと思って、スペイン語初級のクラスに入れてもらいました。そしたらね、授業が始まって初めて気がついたんですけども、周りは全員オランダ人なんです。ということは、これオランダ語で教えるんちゃうかな?と(笑)。

それまで受付の人とかとは英語で話していたんです。オランダ人は標準

的に英語が相当できますから、気がつかなかったんですよ、そのときまで。席に座ると先生が入ってきて、チリ人の女性でずっとオランダに住んでいる人でした。もちろんスペイン語のネイティブスピーカーで、オランダ語とのバイリンガルです。その先生が入ってきて、オランダ語で「皆さん、こんにちは」と挨拶をした時初めて気がついて、あ、このクラスはオランダ語でスペイン語を勉強するんや、どうしよう?って思ったんですよ。

オランダ語ってちょっと触れたことある人いますかね? 英語とドイツ語ができる人だったら、読むのはそんなに苦労しないんですよ。大雑把に言うと英語とドイツ語の間ぐらいの感じで、両方の言語を知っていると推測できる部分が多いんですよ。読むのはそんなに苦労しないんだけど、聴いても全くわからないし発音も難しいです。日本語話者にとっては特に、音の印象が独特なんです。ところが、オランダのそういう市民講座に来るような人たちってほんとに親切で、すぐに僕の苦境を理解して、周りの人が「大丈夫、英語で訳して教えてあげるから」と。でも、最初はそうしてくれたけど、彼らだってスペイン語を勉強しに来てるわけだから、そんなに僕だけのためにずっと通訳なんかしてくれないわけですよ。面倒くさいから。当たり前ですよ。そうやって数ヶ月して何が起こったかという、僕はスペイン語はそんなに上達しなかったんですけども、オランダ語の聴き取りが完璧になりました(笑)。だって、どんな宿題が出たか理解しなきゃいけないから。

だから多分、何か人間って身体的にそういう状況に置かれた方が、大事だからこの言葉を学ばなきゃみたいな意識的な動機でやるよりもずっと効果的だと思います。この言葉を使って何か作業をしなきゃいけないという状況に追い込むことが最も効率がいいというか、コストパフォーマンス的に最高なんじゃないか。そもそも赤ちゃんは言葉を習得しようと思って母語を身につけるわけではないですからね。それを使っておっぱいや食べ物を要求したり、遊んだりしてるだけだから。

ということで、オランダ語はそのときには聞き取りがすごくできたんですが、それから30年使わないと、今は何かテレビでたまたまオランダ語が出てきて

も全然聴き取れない。あのときの俺はどこへ行ったんだろうと思うぐらい、使わないとあっという間に退化しますね。大人になってから習得したということもあるけど、ワープロを使い始めると漢字をどんどん忘れていくみたいに、必要ないものは脳は節約するのでしょうか。しょうがない。でも、言葉の習得はそれを目的としない方がいいということは、はっきり言えるなと思いました。

さて佐伯さんと前回話したことの中で、僕が幾つか強く印象に残ったことがあります。色々あるんですけども、何から話そうかな。まず日本人だけでなく、どこの国でもそうだけど、もともと自分の「国」という自覚はない。国家という自覚は自然に発生するものではないということです。国という自覚が生まれるのは、自分たちと異なる人々と出会う時です。佐伯さんが言っていたように、ヨーロッパは陸地で他国や異民族に接しているから、どうしても自分の国を強く意識せざるを得ない状況で発展してきた。

それに対して日本の場合には海に囲まれているから、いわば自然の国境みたいなものがあって、それによってヨーロッパに比べるとそれほど「国」を自覚しなくてもよかった。日本で「国」というと故郷、あるいは封建時代の「藩」のような意味ですね。ところが外圧が生じるとどうしても国家意識が出てくる。大きな外圧はいつ生じたかという、古代においては隋とか唐とか中国の脅威というのが大きかったでしょうね。白村江の戦いに大敗して、唐と新羅の連合軍が日本を侵略しにくるんじゃないかということになり、天智天皇は大津京に遷都したり、瀬戸内海に防衛施設を建設した。そういう歴史的危機には、やっぱり日本というものをみんなが自覚して、天智天皇の後の天武天皇の時代には、日本の統一性とそれを率いる強い指導者の必要性が強く感じられた時代があったんだろうと思います。『古事記』や『日本書紀』が書かれたのもその頃ですよ。何であんなものを書く必要があったのかというと、日本はみんな一つだよということを物語によって内側にも示し、記録として外側に対しても示す必要があったからですね。

今、僕は観ていないで言うのですが、NHKテレビの大河ドラマでやっているような『源氏物語』の時代は、一条天皇の頃だから大体西暦で1000年

前後ですよ。10世紀の終わりから11世紀の初めというのは、そういう外国の脅威という意識が比較的薄くなって、日本国内の独特の文化が発展していくわけですが、でもまもなく貴族社会は変質して行って、長くは続かない。その後も、日本が外国の脅威にさらされた時代は何度かあります。元寇が来たり、16世紀にはポルトガル人が来たり、言うまでもなく幕末もそうですけれども、そういった外圧というものが、日本人に国というものを意識させるきっかけになって来ました。戦後の昭和時代はある意味平安時代や江戸時代のように、あまり外国の脅威を心配しないでいられた。それはアメリカが護ってくれるという幻想があったからなのですが、グローバル化が進んでその幻想が揺らいでいる現在は、再び外からの脅威が高まり一般の人々の間に「日本」という意識が広がっていると思います。

自分自身が生きてきた時代というのは、僕は昭和31年生まれですから、戦争が終わって11年後に生まれたわけです。「もはや戦後ではない」とかいう言葉が流行した時代ですが、ここでの「戦後」というのは終戦直後の混乱期、焼跡と闇市の「戦後」は過去のものとなって、これからは経済発展してゆくのだという宣言だったと思います。アメリカに護られて経済成長する昭和もやはり「戦後」であり、戦後という時代意識がなくなったわけではありません。

そういうわけで、僕が子供時代を過ごした昭和30年代、40年代というのは、一般の人々はある外圧というものを感じてなかったんじゃないかなと思うんですね。もちろんそれは、アメリカという圧倒的な外圧があったからなのですが、それは多くの人にとって無意識的なもので、アメリカは無条件に良いもの、目標にすべきものという文化が支配的でした。その保護のもとに自分たちは経済活動に専念していればいんだということが、国民的に合意されていたと思います。だから、日本社会や日本人の特殊性が話題になったり、エコノミック・アニマルという日本人像が揶揄の対象になったりはしたけれども、「日本」をシリアスな問題として捉え、本来の日本とは何かと問いかけたりすると、ナショナリストとか右翼というレッテルを貼られた。子供や若者の文化の中でも、欧米的なものが無条件に価値が高くて、日本やアジア的な要素は遅れ

ているか、せいぜいエキゾチックな価値を持つだけでした。日本人なのに、まるで欧米人の目を通して自分自身の社会や文化を見ているような感じで、その方が知的というか進んでいるという認識がありました。

ただ僕自身は前にも言ったように、ちょっと特殊な育ち方をしてしまっていて、父親が子供の頃に事故で亡くなって母子家庭になり、ある時期から母方の祖父の影響を強く受けて育ったので、戦後の子供なのにどこか「戦前」的な価値観を持って育ちました。おじいちゃんは明治34年生まれで、大正期に若者時代を過ごした人です。母は昭和5年生まれで戦時中に少女時代を過ごしましたから、僕を子育てしながら口ずさんでいた歌も、昭和初期の流行歌と共に軍歌とか「紀元は二千六百年」でした。それを子供の時に憶えてしまって、後に学校で歌うと「何でそんな歌知ってるんだ?」と言われてたり、祖父から教えられた古い日本への愛着とか愛国心のようなものを表すと、ちょっと危険思想扱いされたりしました。この子は将来、黒い街宣車に乗るようになるんじゃないかとか(笑)、そういう感じでしたよね。

中学や高校では左翼的な雰囲気も強くて、日本はまだ近代的自我や個人の確立が不十分である、みたいな考え方が知的で進歩的であるという価値観が支配していました。つまり作文でそういうことを書くと褒められるということです。だからもちろんそれに自分を合わせていったと思いますが、コアの部分には戦前的な国家観や愛国心も残っていて、しかしそれは堂々と表明してはいけないものだと感じていました。1976年に京都大学に入ったときにも、もちろん同じでした。僕は学生運動にはまったく関わったことがなく、学生運動であれ体育会系であれマッコイな集団には生理的に入れないのですが、マルクス思想には漠然とした関心を持っていました。今は大学も一般社会もずいぶん雰囲気が変わりましたね。愛国心を口にしても即右翼と言われるようなことはなくなりました。それは基本的には、健全な形に戻りつつあるのだと思います。

とはいえ日本について考える環境は、今もまだ多くの人々にとっては正常化したとは言えないでしょう。一方では戦後のアメリカ占領時代に行われた教育や文化政策が、日本人に戦争についての過大な加害者意識を植え付



けて自虐的な歴史観を持たせるための「洗脳」であったと主張する人々がいます。昔もいましたが、今はかなり拡大してきたと思います。他方にはそうした考えをすべて「陰謀論」と決めつける人々もいる。そしてこれら両極端の人々は互いにまったく対話不能です。そもそも相手の考えを最初から「洗脳されている」とか「陰謀論」と決めつけるのは、そもそも議論することすら拒否しているということです。僕は、もしも陰謀というものが存在するとしたら、むしろこうして人々から対話や議論の可能性を奪い、互いに孤立させる方向に誘導されているという点にあるのではないかと感じます。

前回の対談後の質疑応答の時には、宗教の話も出てきましたね。それは佐伯さんが、最近遠藤周作の小説「沈黙」を読み返してみて、キリスト教のことを考えたと言われたからです。その時のやりとりがちよっと面白かったなと思いました。宗教は次回の島蘭進さんとの対談のテーマでもあるんだけど、僕は現代、宗教について考えるのはとりわけ大切ではないかと思います。「宗教」も「日本」と同じように、結構タブーなんですよ。軽々しく触れてはいけない話題とされています。マスメディアや広告代理店に勤めた卒業生に聞くと、入社すると先輩から、政治と宗教だけはタッチするなって言われるらしいんですよ。

まあ、絶対に触れてはいけないわけではなくて、注意して安全な扱い方をしないとイケないということでしょう。宗教も国家も誰にとっても重要な、まったく普通のトピックであるはずなのに、触れてはいけないと脅されてきた。昔からそうだったんだけど、宗教に関しては特に1995年のオウム真理教地下鉄サリン事件で決定的になりましたよね。それ以来、何か宗教ってのはヤバいもの、声をひそめて語らないといけないものになりました。仏教やキリスト教のような既存の歴史的宗教も、自分たちが人生に役立ち社会に貢献する、合理的で安全な企業体のようなものであることを示す必要に迫られていると思います。けれども宗教とはそもそも、世俗的な合理性や有用性では測れないからこそ「宗教」なのだと思うのですが。

国家にしても宗教にしても、その他いろいろ政治的な話題にしても、意見を異にする人同士がある程度普通に喋れるということが一番健全なことであって、タブーにしなければならないというのは不安定で脆弱な状態だと思っています。これはちょうど人間の体と同じで、有毒なものをまったく摂取しないで安心安全なものばかり飲み食いしていると、弱くなります。身体が毒に対して耐性を持たなくなるからですね。清潔になり過ぎた社会では人間の免疫力が弱くなって、昔だったら平気だったものにも過敏に反応してしまう、言われるじゃないですか。1980年代にインドとか行っていますけれども、あの頃の不潔さって、今のこの身体で行ったら大丈夫かなと思いますね。今はインドも綺麗になっていますが。その頃平気だったのはきっと、自分が育った昭和の日本もそこそこ汚かったからなんですよ。だから強かったんでしょうね。

宗教や政治に関わる話題というのは多かれ少なかれ毒を含んでいるので、毒に当たらないように注意は必要なんですけれども、全くタブーにしてしまうと、私たちの思考力は脆弱になっていくと思います。政治的な適切さ（ポリティカル・コレクトネス）とか、コンプライアンスとか、人を少しでも傷つけないように気をつけることはそれ自体は結構なことなんですが、私たちの言語世界を完全に安心安全の無菌状態にしてしまうと、結果として言語も思考も弱体化していく。身体の免疫系もやっぱりちよつとずつ毒を摂取しないとレベルが維持できないように、心の免疫系を鍛えるためにも多少毒を含んだ話題を日常的に取り込んでおいた方がいいと思います。しかしこれは今日表立って言うとすぐに攻撃されるので、お互い黙って分からないようにやった方がいいのかもしれませんが。

1990年代初めにオランダに滞在していた時、自分と同世代のアフリカ人、中東の人とか、ユダヤ教徒もいたし、カトリックの人もいたし、北米圏から来たプロテスタントの人もありましたが、わりとお互いの宗教について冗談も交えながら会話しているんですね。僕は互いの宗教について冗談とか言ったら喧嘩になるんじゃないかと思いましたが、みんなインテリですから喧嘩にはならない。それにしても、そんなにあけすけに相手の神様についてコメントし

たりできることにショックを受けたというか。

その時「お前は日本だからシントーなんだろう?」と訊かれて言葉に窮した。だけれど悔しいから「そうだ」っていったんですけれども。すると「神道では死後の生という問題をどう考えるんだ?」とか。シリアスな議論というよりは、そういうことを雑談的に話し合える方が健全だなと思いました。

昔はよく大学の周りとかを歩いていたら、「あなたは神を信じますか?」と、聖書を持った背の高い白人の金髪の青年が、モルモン教徒ですけれども、尋ねてくるんですよ。その時に「いやあ…」とか言っていると「聖書を読んだことがありますか?」とかというふう聞いてくるわけです。そういうことをどんどん突っ込まれるから、僕はある時から「あなたは神を信じますか?」に「はい、もちろんです!」と答えると、結構相手はびっくりする。日本人はもっと、思いきって即答するというワザを身につけた方がいいですね。

昔勤めていた私立大学の周辺で、これは宗教じゃないけど、ちょっと悪質な英会話教材のキャッチセールスとかが横行していました。口車に乗って契約書にサインすると、20万円ぐらいの教材を買わなければいけない。大学のゼミが学生と話ししているときにそのことが話題になって、学生があれのセールスマンは口が上手いがなかなか放してくれないで困る、走って逃げるしかないと言うので、逃げるのは悔しいから相手が即あきらめるように答えてやればいいじゃない、と言った。もしも「英語を話せるようになりたいと思いませんか?」と話しかけられたら、「私は英語はパーフェクトなので必要ありません」って答えればいいじゃないかと。そしたら学生が「そんなこと言って、そんならしゃべってみると言われたらどうするんですか?」と言うので、その時は「何で見ず知らずのお前のために英語喋らなきゃいけないんだ」と答えればいいと。だって常識でしょう? 通りがかりの人を捕まえて英語しゃべってみるなんて誰も要求できません。当たり前ですよ。

最後に次回の、島藺進先生との対談に向けて、もうひとつ宗教のことを話して終わることにします。

外国にいるとき、日本の宗教は神道なのか仏教なのかみたいに聞かれた

ときに思ったんですが、日本の宗教は多分、神道でも仏教でもなくて、何が入って来ても対立させないで並存させようとするテクニックだと思っているんですよ。歴史的には「神仏習合」ということですが、神仏だけではなくて、何事も論理的に突き詰めて対決させようとせず、すべて共存させようとする。まあ「和をもって尊しとなす」ということなんです。これには抑圧的で悪いところもあるのかもしれないけれども、これが日本の宗教的風土の強みであることは確かです。

キリスト教が来ても日本化するしね。一神教のような、有無をいわず善悪を分けるような宗教でも、まあまあ仲良く、みたいになる。この間話題になった遠藤周作の「沈黙」の踏み絵の場面で、キリスト教の信仰なのに何だか観音信仰みたいに、イエス様が観音様みたいになっているじゃないかという感じで、観音様みたいなイエス様なら受け入れられるんですよ。イエス様が踏んでもいいよと言ってくれると、そのイエス様の方が本当のイエス様のように思えてくる。これは本物のキリスト教なのか、という疑問に対して、まあまあその辺はカタいことなしで、みたいな。見ようによって本当にいい加減で、だから日本はダメなんだとも言いたくなるんですが、そういうテクニックというか伝統を強固に持っているところがすごいと思いますね。

こういった、下手すると対立して血みどろの戦いになってしまうものを並存させるというのは、悪く言えば、そんなことやったらまともな議論ができないし、正邪善悪があやふやになってしまったりするじゃないかと非難されるかもしれませんが、だからと言ってどうにもならないんですよ。それに、一神教や西洋文化の中にも、曖昧な共存のような伝統もないことはないんです。目立たないけどね。日本はそれが中心になっているところがユニークかもしれない。

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教などの一神教って、基本的に砂漠で生まれた宗教ですからね。砂漠というのは本当に過酷な環境で、生命というのが完全に無化してしまうような環境ですから。そうした環境に適応した思考様式が、宗教という形をとったものだと思います。それに対して日本は山と森林なので、生命の多様性、生成変化、死と再生といった世界観によって、

思考そのものがフォーマットされているのではないかと思います。森の自然を見ていたら、多様な生き物が生まれては死に、不断に生々流転してゆく。そこから多神教的な、輪廻転生とかが普通に実感として感じられる世界観が出てくるのだと思います。だから対立するものがあっても、砂漠のように一方が他方を完全に絶滅させるということにはならない。戦いはあり勝敗は決まって相手を従わせるんだけど、一応何か位を与えとか、相手を殺してしまったらそれを神様として祀るとかというふうにして、何とか併存の道を探ろうとする。これはけっして日本人が平和主義者だからじゃなくて、生態学的な環境が思考を決定しているということに過ぎないと思います。

ようするに宗教って頭の中だけの問題じゃないし、個人の心の問題でもないと思っているんですよ。現代は何でも個人の問題に還元するけれども、宗教だって本当は個人の判断だけで決められるものじゃないと思うんですよ。

2024年6月15日（土） 於：FLAME in VOX

12の対話実行委員会 (TWD)

2024